

## 思考・認識・判断を表す英語動詞（１）

友 繁 義 典

人間環境部門

### English Verbs of Thinking, Cognition and Judgment (1)

Yoshinori TOMOSHIGE

School of Human Science and Environment, University of Hyogo

1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

There are a great number of verbs of thinking, cognition and judgment in English. In this paper we examine the meanings and usages of *believe*, *think*, *consider*, and *know*. As is well known, there are three types of complements: *that*-complements, *to*-infinitive complements and small-clause complements. After examining the nature of the above verbs, we consider which verb may co-occur with which complement type.

Key words: *that* complements, *to*-infinitive complements, small-clause complements, semantics, pragmatics

## 1. はじめに

英語では思考・認識・判断を表す動詞が豊富である。本稿では、believe、think、consider、know の4つの動詞に的を絞り、それらの意味とそれらに後続する補文に関して考察することにする。

## 2. believe に関して

### 2.1. believe の意味

Oxford Advanced Learner's Dictionary 第8版 (以後、OALD) の believe の定義は、to feel certain that sth is true or that sb is telling you the truth とある。これは、日本語の「信じる」「(～の言葉(話))を信じる」が対応することは、次の例文 I believed his lies for years. / I don't believe you! から窺える。また、believe の第二義として、to think that sth is true or possible, although you are not completely certain とある。この定義での believe は、「...だと思う」の日本語が対応する。この意味の believe を含む例文として、Police believe (that) the man may be armed. / It is believed that the couple have left the country. などがあげられている。そして、第3の定義として、to have the opinion that sth is right or true とある。これは、「～が...であると思う」の日本語が対応し、例文 The party believes (that) education is the most important issue facing the government. があげられている。

また、Oxford Learner's Thesaurus: A Dictionary of Synonyms (2008) (以後 OLT) では、believe の定義は to have an idea that sth is true or possible, although you are not completely certain とあるが、これは believe

の重要な特徴づけと考えられる。さらに Longman Essential Activator 第2版 (2006) (以後、LEA) では、believe の第一義は、to think that something is true or that someone is telling the truth、とあり、第二義として to have an opinion that you are sure is right, especially about something important such as life, religion, or politics. とある。

以上のことから、believe は、「何かについて意見を持っておりそれが正しいと思っている」あるいは「完全に確信があるわけではないが、何かが真である (あるいは可能である) と考えている」ことを意味することが確認できる。

### 2.2. believe に後続する3つのタイプの補文に関して

アドバンスト・フェイバリット英和辞典初版 (2013:166) には次のような例文が記載されている。

- (1) a. I believe that he is alive.  
b. I believe him to be alive.  
c. I believe him alive.

同辞典は、(1a) が口語で最も普通の表現で、(1b) は、改まった表現、そして(1c) は (1b) よりもさらに堅い表現であると説明している。以後、便宜上 (1a) のように that 補文 (that complement) を伴う文を A 型、(1b) のように to-不定詞補文 (to-infinitive complement) を伴う文を B 型、(1c) の him alive のように小節 (small clause) を伴う文を C 型と呼ぶことにする。

アンカーコズミカ英和辞典初版 (2008) には

I believe him to be honest. = I believe that he is honest. の例があり、後者の方が「普通」と説明されている。しかし、スーパーアンカー英和辞典第4版(2011)にも、全く同一のペアの例文が記載されているが、同辞典はB型の方が「普通」としている。また、新英和中辞典第7版(2012)にも同じ例文が載せられており I believe him (to be) honest. は I believe that he is honest. に書き換え可能と説明しているが、両者の違いについての説明はない。さらに、エースクラウン英和辞典初版(2012)にも、同じペアの例文があげられており、A型の方が普通であるとしている。ライトハウス英和辞典第6版(2012)においては、They believe (that) she is honest. = They believe her (to be) honest. と記載されているのみで、両者の違いに関する説明はない。ルミナス英和辞典第2版(2010)でも、類似の例文が記載されているが、意味の違いに関する説明はなく、We believe (that) she is honest. = We believe her to be honest. = We believe her honest. のように単にこれら3つの例文が等式で結ばれているだけで、それらの違いに関する説明はない。<sup>1</sup> 以上の英和辞典の記載から分かることは、スーパーアンカー英和辞典初版を除いてそれ以外の辞典はすべてA型が少なくとも話し言葉では普通であり、B型はA型に比べてフォーマルな堅い言い回しとして説明していることである。

以上の英和辞典からは、A型とB型の文体上

<sup>1</sup> その他、ユースプログレッシブ英和辞典初版(2004)、ウィズダム英和辞典第3版(2013)、オーレックス英和辞典初版(2013)、ジーニアス英和辞典第4版(2013)などにおいても類例の記載があるが、3つの型に関する違いは明確化されていない。

の違いに関する情報は得られるが、上記の英和辞典からは、B型とC型の違いが不明である。また、OALDやLEAあるいはOLTなどからも3つの型の違いに関する情報は得られない。次節で、論文、文法書でのbelieveに関する説明はどのようなものであるか見ることにする。

### 2.3. A型とB型の特徴と使い分け

Riddle (1975)、Borkin (1984)、毛利 (1983) などは、B型は文主語の主観的な見解が述べられるのにふさわしいとしている。それに対して、A型は、文主語のthat補文が表す命題に対する態度は外からの出所に(outside source)によるものであることを含意するのに用いられるという。Bolinger (1977:125-6) は、次のA型の(2a)(2b)は適格文であるが、B型(3a)(3b)の容認性は低いと述べている。

- (2) a. I believe (that) the rain is falling.  
b. I believe (that) the word has already come.
- (3) a. ?I believe the rain to be falling.  
b. ??I believe the word to have already come.

上の例は、客観的データに基づく推論は、A型が、また話し手の主観的な判断はB型が使用されるということを支持する。「雨が降っている」状況は客観的な事実として捉えることが可能でありA型がふさわしい。しかし、誰の目から見ても真偽が確認できる状況について「他人の見解はどうか知らないが、私は「雨が降っている」という命題を真であると思う。」と表明するのは適当ではないからB型は容認度が低いものと

思われる。また、(3b) の容認性が低いのも「便りがすでに届いている」状況が客観的に確認できるからであろう。

また、Bolinger (1977:126) によると、I believe the report. は The report is true. と言っていることに等しいという。同様に、I believe the man. は The man is honest. と言うに等しいという。このように believe に肯定的な意味が含まれるので、I believe the report to be true. や I believe the man to be honest. といった表現は問題なく用いられるという。Bolinger (1977:126) は、補文が中立的な内容である場合には、B 型はふさわしくないとしている。例えば、「明かりがついている」状況や「ジョージは用意ができています」状況は neutral な内容であるので、次の (4a) (4b) は容認度が低いという。

- (4) a. ?I believe the lights to be on.
- b. ?I believe George to be ready.

しかし、同じ状況の表現に A 型が用いられると問題はなくなる。すなわち、I believe (that) the lights are on. や I believe (that) George is ready. は、適格文である。実際、A 型が無標であり、that 補文の内容に関して制限はないものと思われる。すなわち、that 補文の命題は肯定的でなければならないという制限はないと考えられる。それに対して、B 型は、有標であり、幾つかの制限をクリアしなければ使用できない。すでに見たように、Bolinger (1977:127) は、I believe this decision to be right (?wrong). や We believe these views to be important (?unimportant). を例にあげ、B 型では補文内

容が基本的にプラス評価であることがその成立条件の一つとしている。ただし、believe に後続する名詞が、例えば、claim, report, opinion, theory, accusation などのように「情報 (information)」を表すものである場合は、その限りではないという。次の例では補文内容が否定的ではあるが適格文であるという (Bolinger 1977:127)。

- (5) I believe these claims to be unwarranted (accusations to be false, supposition to be unfounded).

ただし、(5) のような文は、法廷で用いられる堅い文であり、フォーマルな場合にのみ辛うじて認められる (passable) という。このように、B 型の使用範囲は限定的なようである。Bolinger と同様の考えをしている学者に、Borkin (1984) がいる。Borkin (1984:58) によると、補文内容が肯定的 B 型の (6a) は適格文であるが、補文内容が中立的な (6b) は容認不可能であるという。

- (6) a. I believe Myrtle to be in the pink of health.
- b. \*I believe Myrtle to be at the office.

ところで、これまで B 型では補文内容が肯定的な内容が現れるとする説明を見てきたが、実際、補文内容が中立的あるいは否定的であっても容認性に問題がない例が存在する。次に例を見ることにする。

- (7) a. I believe Bob to hate Sally.  
(Postal 1974:81)
- b. I believe her to be insane.  
(稲田 1989:151)
- c. I believe him to be deceiving me.  
(Stuurman 1990:219)
- d. Mary believes John to be a fool.  
(Thomson and Hay 2000:179)
- e. We believe John to be guilty.  
(MacCawley 1988:146)
- f. I believe him to be in his room.  
(Verspoor 2000:215)
- g. John believed the stranger to be  
a policeman.  
(Quirk et. al. 1985:1294)

(7a) (7b) (7c) (7d) (7e) では、すべて補文内容が意味的には好ましくない。また (7f) (7g) の補文内容は中立的である。さらに、次のように、to+be+V-ing や to+have+V-en のような進行相や完了相を伴う補文に関しては、Bolinger や Borkin が述べている制限は適用されない例が存在する。

- (8) a. Max believes Bill to have left.  
(Jackedoff 1972:77)
- b. Max believes Bill to be leaving.  
(Ibid.)
- c. Fred believes John to have eaten  
the meat. (Menzel 1975:105)
- d. Fred believes John to be eating  
the meat. (Ibid.)

少なくとも上のデータからは、B 型では、補文

が完了相や進行相である場合は補文内容が無色な場合もあることが確認できる。結論的な言い方をすると、要するに、B 型における不定詞補文は、「状態」を表すということに尽きると考えられる。さらに、次の例に見られるように、B 型を用いて未来に言及することは出来ない。

- (9) a. \*I believe Mary to arrive tomorrow.  
(Palmer 1973:200)
- b. \*I believe Bill to win tomorrow.  
(Postal 1974:4)

(8a)~(8d) で見たように、補文が進行相や完了相である場合は、特にその意味内容に制限はないように思われる。しかし、補文が「to+be+形容詞 (名詞)」の場合には、Riddle (1975)、Bolinger (1977)、Borkin (1984)、Dixon (1984)、Wierzbicka (1988)、Mair (1990) などが共通して述べているように、典型的には、話し手の直接的な関与を通じた主観的な価値判断が表現されるとしてよいように思われる。特に、Mair (1990:20) は、B 型は、「知識と主観的判断の結合 (a combination of knowledge and subjective judgment)」を表し、他方 A 型は、「純粋な知識 (plain knowledge)」を表すと述べている。もし Mair (1990) が正しければ、B 型は、A 型の特徴も併せ持つと考えることも可能となろう。次節で、B 型は、まさに話し手の主観的な判断と話し手自身が直接入手した知識・情報に基づく価値判断を表明するのに最も適していることを裏づける Davison (1984) による議論を見ることにする。



## 2.4. B 型が話し手の主観的な判断を表すのに最もふさわしい理由

Davison (1984:810) があげている次の例について考えてみることにする。

- (10) a. The police believe that a gang member was responsible.  
b. The police believe a gang member to be responsible.

Davison (1984:810) によると (10a) は、警察がある特定のギャングの一員を念頭に置いているとする解釈 (特定の解釈) と、不特定のギャングの一員を念頭に置いているとする解釈 (非特定の解釈) のいずれも許す。その一方 (10b) に対しては、特定の解釈が適用されるという。ある特定の entity を念頭に置くことができる状況というのは、話し手が直接何らかの知識や証拠を入手していることが背景にある場合であると思われる。実際、直接入手した情報が手元にあればこそ、特定の entity の存在も確認しやすいであろう。さらに、Davison (1984:817) があげている例を観察することにする。

- (11) a. We believe that the Earl of Oxford wrote Shakespeare's plays.  
b. We believe the Earl of Oxford to have written Shakespeare's plays.

(11b) は、話し手が直接入手した証拠に基づいて補文が表す命題が真であるとしている文である。それに対して (11a) は、「直接的に知られ

ていること」と「間接的な証拠から分かる」ことの両方を表現することが可能であるという。言い換えると (11a) は、話し手の直接的な関与と間接的な関与の両方の解釈を許すが、(11b) は話し手の直接的な関与の解釈のみを許すということになる。そして (11a) に関する解釈は曖昧であるが故に、話し手の直接的な関与を明示するために B 型の (11b) が採用されると Davison (1984:817) は説明している。

以上のことから、B 型は、A 型に比べて主観性の強い表現であると結論づけることができる。

## 2.5. C 型に関して

先ず、C 型の例文を見ておくことにする。

- (12) a. We believe John guilty.  
(MaCawley 1988:146)  
b. I believe him guilty.  
(安藤 2008:106)  
c. ??I believe Sally an American.  
(稲田 1989:151)  
c. I believe her insane/ honest/  
smart. (Ibid.)

C 型は、補文命題に対する話し手 (文主語) の判断が直接的な体験に基づく主観的なものであるとされている (Borkin 1984)。次の例は、believe ではなく seem を含む例であるが、Dixon (2005:204) は、to be が省略されている文は「判断」が下されている文であると述べている。

- (13) a. He seems a good doctor.  
b. \*He seems a doctor.

## c. He seems an idiot.

上の各例から、補部が小節の場合は、小節に価値判断を表す表現のみが許されることが分かる。(13b)では単に「医者」という職業が述べられているだけで、話者の判断が表明されておらず、それ故(13b)は不適格な文となっている。もちろん、to be を挿入した He seems to be a doctor. は適格文であることは言うまでもない。この説明を「believe+小節」型に適用すると(12c)の容認性がかなり低い理由は、「サリーがアメリカ人である」という内容は客観的にその真偽を証明することができるためである。また、Borkin (1973:46)も、I find this chair comfortable. を例にあげ、この文は話し手の直接的な体験による個人的な判断を表す文であると説明している。以上のことを believe にあてはめてみると、C型は、話し手が直接体験を通じて、主観的・個人的価値判断を表明するために用いられるとすることができる。<sup>2</sup>

## 2.6. I believe zero-that 補文と I believe that 補文

周知のように、I believe zero-that 補文と I believe that 補文の二つの型が存在する。辞書類でも I believe (that) ... と記載されており、that はあってもなくても同じであるという印象を受ける。しかしながら、実際は zero-that

補文と that 補文には違いがある。I believe zero-that は主観的な態度を表す表現であるが、この表現は、自分の主張に対して何がしかの証拠 (some evidence) がある場合に用いられる (Wierzbicka 2006:215)。また、I believe zero-that は、挿入文としての機能することもあり、補文内容に関する主張をやわらげる marker としての働きもある (Goddard 2003:118)。それ故、I believe zero-that は、文頭、文中、そして文末のいずれの位置にも現れうる。したがって、I believe you can get custard in a tin. に並んで、You can, I believe, get custard in a tin. と You can get custard in a tin, I believe. の形も可能である (Goddard 2003:118)。それに対して、I believe that 補文は、I believe zero-that 補文よりも強い (stronger) 表現である。この型の方が、補文内容に関する確信度が高い。したがって、I believe that に、例えば、strongly のような副詞を付加すると、当然、意味情報が豊かになる。そのため I believe strongly は、主節としての解釈が優勢になる。その結果、補文内容を表す節が従属節であることを明確に示すための marker として that が必要となる。この場合、必ず that が必要があり、that なしでは成立しない。それ故に ?I strongly believe you can get custard in a tin. は容認度が低く、I strongly believe that you can get custard in a tin. と表現されなければならない。同様に、John believes fervently that the world was flat. は自然な文だが、\*John believes fervently the world was flat. は容認されない (福地 1985:187)。また、土屋 (2012:104) は、話し手が、補文命題の「断定」に確信をもっていれば、

<sup>2</sup> Verspoor (1999:515)は、?I believe him honest. を uncommon construction であると述べその容認性は低いとしている。また、八木 (1999:136)も、\*I believe him honest. を容認不可能としている。ただし、I believe him dead. は問題のない文であり、話し手の心中の断定を表すと述べている。

動詞の意味は強意的になり、**that** が使用され、他方、命題内容の真偽に関して推断的な断定となれば、動詞の意味は弱くなり、**that** は使用されないと主張している。言い換えると、補文内容に関して、何がしかの確固たる「根拠」があってその内容を断定する場合に **I believe that** が用いられ、その一方で、「根拠」があるにはあるがそれが強く断定できる程度まで確固たるものではないと話し手が思っている場合には、**I believe** が挿入文的に用いられるということになる。このように、実際、補文標識詞 **that** を伴う場合と伴わない場合では違いが存在するのである。

## 2.7. **I believe that** 補文に関して

**I believe that** 補文に関しては、次の例に見られるように、**I believe** が背景化され挿入節としての解釈がなされる場合がある (Huddleston and Pullum (2002:1536))。

- (14) a. **I believe that there is a God.**  
 b. **I believe that nominations close on Tuesday.**

**I believe that** 補文において **I believe** が挿入文として解釈される理由は文脈 (context) や **that** 補文の内容 (content) によると Huddleston and Pullum (2002:1536) は述べている。(14a) に関しては、その内容から話し手の信念についての陳述であると解釈される。つまり (14a) は、話し手の「神の存在」に対する信念の表明であり、この文では **I believe** が主であり **that** 補文が従である関係が認められ、**I believe** がこの文の中の主役、言い換えると、

**main assertion** (中心となる主張) を表す要素である。一方、(14b) に関しては、**that** 補文が語用論的に前景化されるのが一般的であると Huddleston and Pullum (2002:1536) は説明している。この場合、**I believe** は a modal qualifier の扱いとなり挿入文の解釈、つまり、**Nominations close on Tuesday, I believe.** と同様の解釈が適用される。このように、**I believe that** 補文においては、**I believe** は、語用論的にそれが前景化されたり背景化されたりすることになり、この型はそのいずれかの解釈が文脈と補文内容次第で変わることになる。

## 3. **think** に関して

### 3.1. **think** の意味

OALD では、**think** は、to have a particular idea or opinion about sth/sb; to believe sth と定義されている。また、Longman Dictionary of Contemporary English (以後、LDOCE) では、to have an opinion or belief about something さらに、OLT では、to have an idea that sth is true or possible, although you are not completely certain と定義されているが、この節では、上記の辞書で定義づけられている **think** に関して見ていくことにする。

### 3.2. **think** に後続する補文に関して

**think** とそれに後続する補文に関して、次の例を見ることにしよう (八木 1999:127)。

- (15) a. **They think that he was honest.**  
 b. **\*?They think him to be honest.**  
 c. **They think him honest.**



八木 (1999:127) では (15b) に見られるように、B型は容認度がかなり低いとされている。また、Quirk et al. (1985:1204) も、同様に ?Newsman thought the Broadway production to have made Max's fortune. を例にあげ、容認性が低いとしている。さらに、Thomson and Hay (2000:179-80) は、\*Mary thinks John to be a fool. を例にあげ容認できないと述べている。このように、八木 (1996, 1999)、Quirk et al. (1985) また Thomson and Hay (2000) などは、think はB型では許容されないあるいはされにくいと見ている。

一方、Swan (1995:592) は、They thought him to be a spy. を例にあげ、このようなB型は、非常に形式張っている上、非常に特異な (very unusual) 例であるとしながらもこの型を認めている。<sup>3</sup> Swan (1995) 以外に、Menzel (1975:95) においても、A型の Fred thinks that Bacon is the real author. と並んでB型の Fred thinks Bacon to be the real author. の例が見られる。その他には、B型が認められている例として、John thought her (to be) stupid. (安井 1983:377)、I think him genius. (Bolinger 1980:20) また He thought it amusing to have two different identities. (Thomson and Martinet 1989:219) などがある。さらに、Dixon (2005:253) も、B型とC

型の両方を認めており、I thought him (to be) stupid/wrong/healthy/dead/vanquished. を例にあげて、to be が省略される場合は、補文内容に関して、話し手が単刀直入な主張、率直な意見を述べていることを表すと説明している。<sup>4</sup> 以上のように、B型を認める学者もいるということに加えて、次のように、COCAにおいてもB型が観察される。

- (16) a. You would more likely think  
him to be somebody's gentle  
soft-spoken grandfather...  
(COCA)
- b. The villagers of Nazareth knew  
Jesus, and they thought him to  
be nothing special.  
(COCA)
- c. We thought him to be the  
original voice of dissent, the  
master blaster who held his  
own even in Hollywood.  
(COCA)

また、C型に関しては、次の (17a) ~ (17d) に見られるように、人物評価がなされている例がCOCAで確認できる。具体的には、(17a) (17b) の補文内容はプラス評価だが、(17c) (17d) の補文内容はマイナス評価であることが確認できる。

- (17) a. She thought him kind.

<sup>3</sup> これは、think の場合に限られることではなく、believe、suppose、consider、suspect などに関しても同じことが言える。これらの動詞を許すB型は形式張った表現であるとされる。また、これらの動詞を伴う受動文は普通に用いられるという。例えば、He was believed/supposed/considered/suspected to be a spy.

<sup>4</sup> ただし、Dixon (2005:253) は、I thought him to be getting healthier each day. から to be を省略することはできないと述べている。これは、補文内容が価値判断ではなく単に状態変化を表しているからであると考えられる。

- b. I thought her wonderful, at this moment.
- c. She thought him arrogant and hot-tempered.
- d. And even if she wasn't, he wasn't going to let her know that he thought her stupid.

以上のことから、think も believe と同様に、A 型、B 型、C 型のいずれの型にも生起することが確認できた。また、B 型と C 型では話し手の主観的あるいは個人的な評価が補文内で表明されるが、その内容は肯定的な場合と否定的な場合のいずれをもカバーすることが確認できた。

### 3.3. I think zero-that 補文と I think that 補文

I think は、いわば認識的副詞 (an epistemic adverb) として機能しており、ためらい (tentativeness) を表すと Goddard (2003:132) は、説明している。また、I think zero-that 補文は、I think that 補文に比べて、口語体において圧倒的に頻度が高いことも報告されている (Goddard 2003:132)。I think zero-that 補文は、補文命題における主張をやわらげる効果をもたらす marker として機能している点では挿入文としての I believe zero-that と同じである。しかし、believe は、証拠に基づいて使用されるが、I think は、証拠なしに使用されるので、その点が両者の違いであることになる (岡田 1985:176)。

次に、Huddleston and Pullum (2002:896) に見られる例を観察する。

- (18) a. I think it is quite safe.

- b. It is quite safe, I think.

(18a) では、統語上、I think が主節で、it is quite safe が従属節である。(18b) では、I think は挿入節として機能しており、it is quite safe が主節であり、I think は従属節である。つまり (18a) では it is quite safe は補文であるが、(18b) ではそれは補文ではないということになる。(18b) のように I think が文末に置かれている場合、I think は「付け足しの情報」であり、文の中では従属的な役割を果たしているに過ぎず、it is quite safe という主張をやわらげる marker 的な存在である。このことは、I believe、I reckon、I guess、I suppose などに関しても同様の説明をすることができる。

### 4. consider に関して

#### 4.1. consider の意味

LEA では consider の定義は、to have an opinion about something, especially after thinking about it carefully とあり、The doctors considered it too dangerous to operate on him. の例文を記載している。また、OALD では、to think of sb/sth in a particular way とあり、LDOCE でも、OALD とほぼ同じように to think of someone or something in a particular way と定義づけている。これらの定義から、この動詞は「人やモノに関して十分に注意して考える」こと、あるいは「独自のやり方で人やモノについて考える」ことを意味することが確認できる。

#### 4.2. consider に後続する補文に関して

Postal (1974:134) は、I consider him (to be) incompetent. を例にあげ、B 型と C 型の存在を認めているが、\*I consider that he is incompetent. のような A 型は認められないとしている。また、Verspoor (1999:515) も、Postal (1974) と同様、consider は、B 型と C 型では許されるが、A 型では許されないと述べて次の例をあげている。<sup>5</sup>

- (19) a. \*I consider that he is honest.  
b. I consider him to be honest.  
c. I consider him honest.

Leech and Svartvik (1975:303) も、They considered him (to be) the best player on the team. の例をあげ、B 型と C 型の両方を認めている。Borkin (1984:46) も I always consider him part of the furniture. といった C 型の例をあげている。Borkin によると、この文を B 型の ?I always consider him to be part of the furniture. で表現すると、その容認性は下がるという。この C 型の文が難なく容認されている理由は、この型が 3 つの型の中で話し手の個人的な判断(評価)を前面に押し出す力が最も強いからだと考えられる。B 型も話し手の主観的な判断に大いに傾斜してはいるが、多少は客観的なデータや根拠も判断材料になっている場合に適切に用いられるとしてよいであろう。つまり、part of the furniture という表現は、もっぱら話し手の主観的な見方の反映であることが

<sup>5</sup> しかし、ジーニアス英和大辞典には We consider him (to be) honest. = We consider that he is honest. の例が見られる。そして、that 補文を伴う A 型の方が不定詞補文を伴う B 型よりも普通であるとしている。

C 型での consider の使用を可能にしているであろう。

ところで、Bolinger (1977:128) は、believe や think の場合と同様、consider に後続する補文内容には話し手の「評価的な判断」が述べられていなければならないと考えていることが次の例から窺い知れる。

- (20) a. I consider John to be a first-rate salesman.  
b. \*I consider John to be a salesman on the third floor.  
c. I consider the trip to have benefited her greatly.  
d. \*I consider the clock to have struck.

中立的な状態を述べている (20b) と (20d) は不適格であると判断されているが、話し手のプラス評価が補文内で表現されている (20a) と (20c) は全く問題のない文として扱われている。確かに、B 型や C 型の例文における補文内容はプラス評価を表すものが多く認められる。例えば、次の各例がそのような例である。

- (21) a. I considered him innocent.  
(Verspoor 1999:525)  
b. I consider John (to be) a good driver. (Quirk et al. 1985:1217)  
c. I consider myself to be lucky.  
(安井 1983:377)  
d. I consider John to be a suitable candidate. (Borkin 1984:55)  
e. I consider him intelligent.

(Wierzbicka 1988:53)

- f. I'll consider my life a success.

(L. Genova, *Still Alice*)

しかしながら、believe や think の場合と同様、補文内容がマイナスの評価の意味を持つ例も存在する。次の例はすべて補文内容が意味的に良くない否定的なものばかりである。

- (22) a. I consider him a sociopath.

(COCA)

- b. So I consider them to be

extremely dangerous. (COCA)

- c. I consider them terrorists.

(COCA)

- d. ... I consider him to be perfectly

unfriendly... (COCA)

- e. You consider me a donkey.

(D. Carnegie, *How to Win*

*Friends and Influence people*)

少なくとも上のデータから、consider の補文が表す内容は、肯定的である場合と否定的である場合のいずれでもありうる事が分かる。

ところで、Postal (1984) や Verspoor (1999) は、consider は補文の内容に関係なく A 型に現れないと主張しているが、実際には、次のように、consider が A 型で許されている例が存在する。

- (23) a. She considers that it is too early to form a definite conclusion.

(OALD)

- b. So in a sense I consider that

we're co-parents. (COCA)

すでに見たように、Bolinger (1977) は、B 型の (20b) だけではなく A 型の \*I consider that the clock has struck. も容認できないと述べている。確かに、consider に後続する補文内容に関して、それが良いとか悪いとかいった話し手の価値判断が述べられるのが一般的であろう。なぜなら、consider にはその意味として「じっくりと考える」あるいは「時間をかけて判断する」という要素が内在しているからであるように思われる。この理由で、B 型と C 型に関しては、中立的な内容は、通例、許されないのではないかと推測される。しかし、(23a) (23b) に見られるように、A 型では補文内容に関して特に制限はないように思われる。<sup>6</sup>

## 5. know に関して

### 5.1. know に後続する補文に関して

先ず、Riddle (1975:470) があげている次の例を見ることにする。

- (24) a. Jane knows her to be intelligent.

- b. Jane knows that she is intelligent.

Riddle によると (24a) は、文主語 Jane の「意見」を述べているに過ぎず、補文内の目的語 her が 現実に intelligent であることを含

<sup>6</sup> ただし、気をつけなければならないことは、consider には「～について注意深く考える」という意味と、「～を...だと考える、～を...とみなす」の意味があるということである。consider は regard とよく似た意味で扱われ、He is considered as a great doctor. のように as を伴った形が用いられることもある (OLT)。



意しているわけではないという。それに対して (24b) は、補文主語の *she* が現実的に *intelligent* であることを含意するという。つまり B 型は、話し手あるいは文主語の「個人的な判断」を表明するのに対して、A 型は、外的な *source* に基づく「客観的な事実」を表明するということになる。<sup>7</sup> 実際、同様の考え方は、Wierzbicka (1988) や Dixon (1995) などにも見られ、B 型は、話し手あるいは文主語の主観的な判断 (*subjective judgment*) を表明するのに用いられるという。さらに、2.3. で触れたように Mair (1990:200) も “...the infinitival construction generally serves to express a combination of knowledge and subjective judgment, rather than plain knowledge.” と説明している。したがって、B 型における *know* は、単に「知っている」というよりも、むしろ「判断する」の意味で処理した方がよい場合がある。例えば、Wierzbicka (1988:49) に、*I know Mary to be a Mormon.* の例が見られるが、これを「メアリーがモルモン教徒であることを知っている」と解釈するのは間違いではないが、むしろ「メアリーをモルモン教徒であると判断している」と解釈したほうが適切である。<sup>8</sup>

<sup>7</sup> ただし、B 型が常に話し手の主観的な判断を表すわけではない。次の各例では *to* 不定詞以下の内容は現実には起こったことが述べられていることに注意すべきである (Duffley 1992:50)。(i) *She was charged with receiving the mink-coat knowing it to have been stolen.* (ii) *...he didn't protest any more to say he loved her because he knew it to be untrue.*

<sup>8</sup> 実際、事実に言及する場合は *that* 補文と共に *know* が用いられるのが通例である。つまり、*that* 補文が表す内容は、客観的に実証可能な事実に限られる。したがって、このような場

Wierzbicka (1988:50) によると、このような B 型は、話し手の “*private knowledge*” を表すという。つまり、この型では、主観性、疑いの可能性、また事実に基づかない視点などが補文内で表現されることになる。したがって、この型は “*public knowledge*” を表す内容を表すのに適さないのでは？ *I know Lisbon to be the capital of Portugal.* は、容認性が低い (Wierzbicka (1988:50))。この文の容認性の低さは、ポルトガルの首都がリスボンである事実は公的な知識に属するという理由による。このように、B 型は話し手の個人的な見解を述べるのに使用されたとする説明は、*know* の場合にも当てはまる。

ところで、*know* はその補文として小節を従えることはないことは注目に値する。例えば、*I know Sally to be understanding and patient.* とは言うが、\**I know Sally understanding and patient.* (Borkin 1984:77) とは言わない。また、*John knew Mary to be the murderer.* とは言うが \**John knew Mary the murderer.* (Dixon 2005: 254) とは言わない。つまり、「判断」の意味を表す *know* は、完全に主観的な意見を述べる小節補文とは相容れないのである。つまり、*to*-不定詞補文を許す *know* はある程度まで客観的な判断を表すということであろう。しかし、例えば、「彼女がこれまで病気になるようなことがあったことは知らない」ことを述べる場合は、*I've never known her ill.* (渡辺 1989:61) と表現される。このような *know* は、*experience* の意味あるいは *see* や *hear* といった感覚動詞のような意味で用いられるという

合には、*I know that Mary is a Mormon.* と表現すべきであろう。



(Palmer 1974:204)。このような例は、他に、I've never known it (to) rain like this. (Swan 1995:299) や I've never known anything like this happen in the college before. あるいは I had never known him ask a favour of this kind before. (Duffley 1992:51) などがある。<sup>9</sup>

## 5.2. I know so. について

I know so. という表現は、例えば、A: You think so? B: I know so. といったやりとりの中で用いられることが多いようである。実際、COCA で検索してみると、上の A と B のようなやり取りが 16 件見つかる。また、ウィズダム英和辞典第 3 版では、I know so. は、Do you think so? に対する返答として、「(そう思うどころか) 確信している」ことを表すのに用いられると説明されている。I know it. と I know that. の違い及びそれらと I know so. の違いについても興味深く議論されなければならないが、紙幅の関係上、このことに関しては稿を改めて論ずることにしたい。

## 6. おわりに

本稿では、believe、think 及び consider は、3つの型すべてに現れることを確認した。また、know に関しては、that 補文と to-不定詞補文を従えることが圧倒的に多く、「経験」を意味す

る場合や「感覚動詞」として用いられる以外、小節補文が後続することはないことを見た。本稿で扱った動詞に関しては、話し手がどのような立場あるいは観点から自分の思いや判断を述べるのかおよそ説明できたように思われるが、実際、どの動詞にどのような補文が後続するのか、完全予測することは難しい。ただ、話し手が補文内容を主観的にあるいは客観的に捉えるか、あるいはその中間的な立場（主観的見方と客観的見方の同居）から捉えるかによって適切に補文が選択されるというおおざっぱな説明は可能であろう。このように、話し手の perspective 次第でいずれかの補文が選択されると考えられが、このことと「類像性」の概念が関係しているように思われる。この概念に基づく補文選択の原理については、本論の続編である「思考・認識・判断を表す動詞（2）」で論ずることにする。

## 参考文献

- 安藤貞雄. 2005. 『現代英文法講義』東京: 開拓社
- Bolinger, D. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman.
- Borkin, A. 1973. "To be or not to be." CLS 9, 44-56.
- Borkin, A. 1984. *Problems in Form and Function*. Norwood, New Jersey Ablex Publishing Corporation.
- Davidson, A. 1984. "Syntactic Markedness and the Definition of Sentence Topic." *Language* 60, p.797-846.,
- Dixon, R.M. W. 2005. *A Semantic Approach to English Grammar*. Sec. edition. Oxford:

<sup>9</sup> Levin (1993:183) も、know を suspect、guess、hold、feel、figure などと共に "conjecture verbs" と呼んでいる。conjecture verbs は、「推論動詞」あるいは「推定動詞」ということであるが、その範疇内に know が含まれている。すると、Levin も know を「推論する」あるいは「推定する」を意味する動詞の仲間と見なしていることは明らかである。

- Oxford University Press.
- Duffley, P.J. 1992. *The English Infinitive*. London and New York: Longman.
- Goddart, C. 2003. "Thinking across languages and cultures: Six dimensions of variation." *Cognitive Linguistics* 14-2/3, 109-140.
- 福地 肇. 1985. 『談話の構造』(新英文法選書 10) 東京: 大修館書店
- Hewings, M. 2005. *Advanced Grammar in Use*. Sec. edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huddleston, R. and G. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 稲田俊明. 1989. 『補文の構造』(新英文法選書 3) 東京: 大修館書店
- Jackendoff, R. S. 1972. *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, MA: MIT Press
- Leech, G. and Svartvik, J. 1975. *A Communicative Grammar of English*. London: Longman.
- Levin, B. 1983. *English Verb Classes and Alternations*. Chicago: University of Chicago University.
- Mair, C. Infinitival Complement Clauses in English. Cambridge: Cambridge University Press.
- McCawley, J.D. 1988. *The Syntactic Phenomena of English*. Volume 1. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Menzel, P. 1975. *Semantics and Syntax in Complementation*. The Hague • Paris: Mouton.
- 毛利可信. 1983. 『橋渡し英文法』 東京: 大修館書店.
- 中村 捷. 2003. 『意味論—動的意味論』 東京: 開拓社.
- 岡田伸夫. 1985. 『副詞と挿入文』(新英文法選書 9) 東京: 大修館書店
- Palmer, F.R. 1974. *The English Verb*. London: Longman.
- Postal, P.M. 1974. *On Raising: One Rule of English Grammar and Its Theoretical Implications*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Quirk et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Riddle, E. 1975. "Some Pragmatic Condition on Complementizer choice." *CLS* 11: 467-474.
- Stuurman, F. 1990. *Two Grammatical Models of Modern English. The old and new from A to Z*. London and New York: Routledge.
- Swan, M. 1995. *A Practical English Usage*. 2nd Edition. Oxford: Oxford University Press.
- Thomson, W. and J. Hay. 2000. "The Semantics of Predicates Taking As and To Be Complements." *MIT Working Paper in Linguistics*.
- 土屋知洋. 2012. 「That 補文と Zero-That 補文の選択と動詞の意味」『21世紀英語研究の諸相—言語と文化からの視点—』 東京: 開拓

社.

Verspoor, M. 1999. "To infinitives." In Stadler, L and Eyrich, C. eds. *Issues in Cognitive Linguistics* 12, 505-526.

Verspoor, M. 2000. "Iconicity in English Complement Constructions" In Horie, K. ed. *Complementation: Cognitive and Functional Perspective*.

Wierzbicka, A. 1988. *The Semantics of Grammar*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamin.

八木克正. 1996. 『ネイティブの直感にせまる 語法研究—現代英語への記述的アプローチ』 東京: 研究社出版.

八木克正. 1999. 『英語の文法と語法—意味からのアプローチ』 東京: 研究社出版.

安井 稔. 2000. 『英文法総覧—改訂版—』 東京: 開拓社.

#### 辞書・コーパス

『エースクラウン英和辞典』 2012. 東京: 三省堂.

『アドバンスト・フェイバリット英和辞典』 2002. 東京: 東京書籍.

『アンカーコズミカ英和辞典』 2008. 東京: 学習研究社.

『ジーニアス英和大辞典』 2001. 東京: 大修館書店.

『ジーニアス英和辞典』 第 4 版. 2006. 東京: 大修館書店.

『ライトハウス英和辞典』 第 6 版. 2012. 東京: 研究社.

Longman Dictionary of Contemporary English. 5<sup>th</sup> ed. 2009. Harlow, Essex:

Pearson Education Ltd.

Longman Essential Activator. 2<sup>nd</sup> ed. 2006.

Harlow, Essex: Pearson Education Ltd.

Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English. 8<sup>th</sup> ed. 2010. Oxford University Press. (OALD8)

Oxford Learner's Thesaurus: A dictionary of synonyms. 2008. Oxford University Press.

『オーレックス英和辞典』 2008. 東京: 旺文社.

『ルミナス英和辞典』 第 2 版. 2005. 東京: 研究社.

『新英和中辞典』 第 7 版. 2012. 東京: 研究社.

『スーパー・アンカー英和辞典』 第 4 版. 2011. 東京: 学研教育出版.

『ユースプログレッシブ英和辞典』 2004. 東京: 小学館.

『ウィズダム英和辞典』 第 3 版. 2013. 東京: 三省堂.

The Corpus of Contemporary American English. (COCA)

(平成 26 年 9 月 30 日受付)